

《特殊な》知識人 —— 湯川秀樹と小林秀雄 ——

田中 希生

I 知識人とは……

かつてミシェル・フーコーは、「特殊な spécifique」知識人について論じたことがある [★1]。ジャン＝ポール・サルトルら 19 世紀から 20 世紀半ばまでの「普遍的な universel」知識人に対する今日的な知識人のあり方について述べたものである。「普遍的な」それ [★2] が、「知識の代理人」として、あるいは「普遍的な諸価値の担い手」として、支配階級にも労働者階級にも所属できず、それゆえ「だれからも委任状を与えられていない」「不断に追放の身でありながら」、「不断に大衆の側に立とうとする努力」を貫く孤独な人間であるとすれば、「特殊な」それは、おのおのがもつ労働や生活の特殊な諸条件のなかで、それにふさわしい知を形成する意志そのものが、半ば強制的におのれに要請する抵抗の声をあげる人物である。前者では、大学人として、あるいは物書きとして、とりわけ文字を司る者にその事例が集中していたとすれば、後者ではその特権的な場は失われる。大学においてであっても作家としてであっても、あるいはそのいずれでなかったとしても、ひとをとりまくさまざまな諸条件が、そのまま権力の湧出する条件であると同時に、抵抗の声の条件となる。高度に専門化した社会において、いかにひとがあまり関わりたがらない、特定領域に所属した人間であろうと、むしろそうであるがゆえに、彼はその諸条件のなかで、権力に抵抗する役割を担わねばならない。

こうした知識人論に対する批判は少なくない。それをいちいち取り上げることはしない

が、ジャーナリズムに登場する専門家たちの軽薄な言葉が度重なるにつれ、また多くの大学人たちが、自分の専門領域に閉じこもり、政治に対するコミットメントを失っていくにつれ、サルトル的な知識人像（日本でいえば「ササラ型」の知識人たる丸山真男であろう）が要請される状況が生じるのは不自然ではない。むしろ、支配階級と労働者階級（あるいは一般大衆）というデュアリズムを知識層が部分的にも受け容れざるをえない知的状況が、サルトルのような問題構成を可能にしているようにもみえ、賛否両論あることはたしかながら、「普遍的な」知識人の実例としてサルトルや丸山がいるように、「特殊な」知識人の実例があることも指摘せねば、公平とはいえないだろう。

そもそも、フーコーのいう「特殊な」知識人という概念が、日本で建設的に理解されているかどうか。フーコーのような20世紀後半のフランス哲学を紹介した日本の知識人たち自身が、特定の専門領域をもたず、文筆家あるいは評論家として領域横断的に活動し、どちらかといえば、サルトルのような「普遍的」知識人に近い振る舞いをしてきたことも、この概念のやや浅い理解に拍車をかけている。しかし、日本にも「特殊な」知識人の実例がある。フーコーが過渡的な一例としてあげたロバート・オッペンハイマーと比較しても遜色ない、湯川秀樹がそれである。彼らとともに、原子物理学という特殊領域において活躍した典型的な学者である（しかも、絶対的客観性の存在、つまり観察者から独立した普遍的な知が存在していることを疑わなかった19世紀の決定論的科学家とは異なる、

20世紀のそれである）。そして学者という一職種の内部にとどまりながら、なおかつ知識人であった。

日本の戦後数十年の知識層の歴史を振り返ると、フーコーが分類した二つの知識人像、すなわち「特殊な」知識人と「普遍的な」知識人とが入り乱れていた時代だったように思える。狭義の文学から原発問題にわたり広く人間について論じ、たんに批評家としか言いようがない吉本隆明のような知識人。それまでにはなかった新しい特定領域に足場を置きつつ政治状況にも介入する湯川秀樹のような知識人。また同じ人物のなかにもそうした要素が混在する様子がかかえる。それは日本がヨーロッパに比して未熟であったか否かという論点とはかかわりがない。たんに、冷戦と高度経済成長の時代が、状況を可能にする特殊な知的布置を生んでいたということである。★3、ヨーロッパにそうした混乱がなかったわけでもない★4。しかしソ連とバブルの崩壊に象徴される時代の変遷は、確実に知のあり方を変えているはずである。

実証的というわけではなく、わたしの立場からする実感にすぎないが、多くの学者やその卵たちが、個別の専門領域のなかで悪戦苦闘を強いられ、強迫的に「競争的研究資金」獲得の風潮に乗り、望む研究とは異なる、しかも文部科学省の視線を内面化した書類の作成に労力を費やす現状は、かつて知識人たちが自分の専門領域とは別のところで取り組んだ、民衆的・人類的な課題への道を奪っている。そこでかつてのような遠い目的にひとの目を向けさせる「普遍的な」知識人が渴望さ

れているように見える一方で、一義的に「競争」を是とする新自由主義的価値観に飲み込まれた学問が、全体として陥っている目前の惨状を見過ごしたまま、余暇に、あるいは部外者として行なう政治的活動で遠い人類の課題が解決されるとも思われない。いまやその余暇にかるうじて研究に没頭する時間を見いだす、多忙な知識層に可能な抵抗のあり方として、湯川秀樹のように、あくまで科学者の立場から発言を続けた「特殊な」知識人の存在は、依然、今後の可能性のひとつを形作っていると考えられる。究極的には、フーコーの分類がこの事例に正確に当てはまるかどうかは問題ではない。ただ一口に知識人といわれるとき、そのなかにもさまざまな立ち位置からなるそれがあ、またそれがあ程度まとまった思想的な背景を伴って、ゆるやかに、かつ無自覚にある種の類型を形成している、ということだろう。わたしの目的も、学問全体からいえば特殊な領域を担う歴史家として、可能なかぎり広く見積もったとしても人文学者として、そうした知識人の歴史的な類型のひとつを提示することにある。

II 科学至上主義者

オープンハイマーは、周知のとおり、原子爆弾製造と実戦投入とを実現したマンハッタン計画の科学部門の主導者となった人物である。原子核の分裂が発見された1938年12月からわずか七年足らず。この計画を主導し実現したという事蹟が彼を他から際立たせているとしても、アインシュタイン、フェルミ、ハイゼンベルク、湯川秀樹や武谷三男らと同様、総力戦体制のなかで科学者が核兵器実現

のために動員されていたという事例を提供しているにすぎない。科学が核兵器を実現したという事実について、特定の誰かというより、多くの科学者が自責の念を分有していた。核兵器のみならず地球温暖化から遺伝子操作に至るまで、科学全般と政治のあり方に目を光らせるバグウォッシュ会議の創設や、国家主権の一部を超国家機関に移譲しようとする世界連邦建設運動など、多くの一流の科学者を政治的な平和運動へ駆り立てる原動力となったことは、よく知られた事実だろう。「科学者の社会的責任」に対する強い自覚に貫かれた彼らの活動は、いわゆる日本の「無責任の体系」とは無縁なものだった[★5]。なかでも、オープンハイマーのたどった道は悲劇的だろう。核兵器の製造競争を危惧した彼は国際的な一括管理を公的に主張し、水爆開発の主導的人物であったエドワード・テラーとも激しく対立し、マッカーシズムの吹き荒れた1954年、事実上の公職追放になると同時にFBIの監視下に置かれることになった。湯川やハイゼンベルクのような敗戦国の科学者が戦後、それぞれの国で確固たる地位を築いていたことを思えば、彼の後半生は皮肉なものである。とくに湯川が一番弟子といえる坂田昌一が、峻烈なマルキシストとして日本の原子力政策に目を光らせつつ、研究者として実り多い活動をつづけていたことを想起すれば、彼の境遇は著しいコントラストを描いている。湯川は彼の死に際し次のような一文を綴っている。

彼は原子力時代における科学者の悲劇を一身で負う象徴的存在だったと思う。…そこには

非常に運命的なものがあつたと感じられてならない。才博士が、人間としてはヒューマニスティックな人だったことを思うと、なおさらその感が深い。…【★6】

それに対して湯川がたどった道はどのようなものだったろうか。その現実的かつ思想的足どりを追うことで、知識人としての彼の立ち位置を明確にしていこう。

湯川が原子爆弾の開発にかかわっていたことは、多くの論者によって指摘される比較的良好に知られた事実である（総動員態勢のなかで、ほとんどの原子物理学者が計画になんらかの形で参加している）【★7】。いくつかの研究書をたどればその推移は次のようになる。1940年4月、航空技術研究所長であった安田武雄中將が雑誌に発表していた核分裂に着眼した陸軍によって、航空本部付きの鈴木辰三郎中佐に命じた研究が日本の原爆計画の始まりであり、それは「原子爆弾製造に関する研究」として仁科芳雄研究室にもちこまれた。1941年5月、仁科研究室は「核分裂計算結果は核兵器出現の可能性が相当あり」とする報告書を提出、1942年末頃には「軍事機密研究二号研究」として航空本部の直轄となっている【★8】。その一方で、海軍においても、とりわけ海軍技術研究所において「原子核物理応用の研究」（略称B研究）が進められていた。一度は頓挫していたものの、戦局の悪化に伴いあらわれた絶対兵器という発想が、再び原子爆弾の製造へと軍部を駆り立てることになる。海軍は、この計画を当時京都帝国大学の物理学において実験を担当していた荒勝文策研究室に持ち込んだ。通称「F

号研究」と呼ばれたこの計画において理論面を担当していたのが湯川といわれ、1944年10月4日のF号研究の第1回会合で核分裂連鎖反応の可能性について報告したことが知られており【★9】、また湯川が出席した1945年7月21日の会合の結論は「原爆製造は原理的には可能、現実には無理」だった【★10】。

それでは、戦前の湯川がどのような立ち位置から自身の専門領域に臨んでいたか。優れた先行研究に力を借りつつ【★11】、またそれらに伍して議論するために奮われる蛮勇への寛恕を読者に乞いながら、いくつか言葉に触れ、その内奥に迫ってみたい。

1941年11月、湯川は次のような一文を記している。

現代科学の進んで行く道、…そこには常に、広大なる未知の世界が残されて居る。現代物理学の行手にある世界。それは最早、吾々人間の言語を絶する寂寥の世界であるかも知れない。人は時折この寂寥に耐へかねて友を呼ぶ。その声であるかも知れない。とまれ科学に志ざす者は、この寂しさにどこまでも耐へて行かねばならぬ。…この道を離れたならば、何の取得もない人間であることを思わねばならぬ。…【★12】

この言葉を、問答無用に推移する時局の誘惑から、おのれの可能性を科学の世界に縛めるべく眩かれた自戒の言葉とみるべきか、それとも時局が強制する政治的な権力に対する科学者のささやかな抵抗とみるべきか。時局に対する彼の立ち位置を能動的なもののみな

すのか、受動的なものとみなすのか。時代がもつ強制力と、人間が時代を形成しようとする意志のどちらを高く見積もるにせよ、彼が、時代や隣人とは無縁の「寂寥」と結びついた科学におのれのあるべき姿を見出していたということだけは、確実である。科学の世界に進んで没頭しようとする湯川に対して、当時の教え子たちが「合理主義的な一面が強い」と感じたり、「科学至上主義的な傾向」を感じた【★13】としても無理はない。そしてその感想はわたしには正しいように思われる。彼にはたしかに不思議な「科学至上主義」がある。「人間的なもの」を語る場合でさえ、それは科学の「真の躍進」のために必要とされている。

学問は勝負事ではない。しかしやはり気合が大切である。学問は芸術とも違う。しかし気魄が肝要なことには変りはない。この気合、この気魄は一体どこから生れて来るものであろうか。科学精神ということがよく言われる。…しかしながら科学を真に躍進せしめるには、この上にさらにもっと人間的なもの、気合とか気魄とかいう言葉で言いあらわされるものが、必要なのではあるまいか。【★14】

その不思議さは、戦後、戦争に協力した多くの知識人のひとりとして「反省」を口にするとき、ますます明らかになる。

とまれ科学は日一日と前進して行く。あらゆる文化は科学を基調としてその姿を変えて行かねばならぬ。科学における大きな発見や発明は往々にして人類の歴史に画期的な変化

をもたらす。最近ではしばしば、戦争がすんだからもう科学は要らぬだろうという声を耳にし、認識不足のはなはだしきに呆れざるを得なかった。反対に今後の世界は常に科学に追随して進化して行くだろう、といっても過言ではないのである。人間自身でさえも科学の発展に伴って進化すべき運命を免れることができない。…人間が人間自身の本質に関して、あらゆる方面から絶えざる科学的検討を行い、その成果に基づいて絶えず人間の能力と人格の向上を図ることが、今後人類自身にとってますます重要な課題となって来るであろう。科学自身がまた、人間性の一つの現われであることを忘れてはならないのである。

【★15】

この文章は、もとは1945年11月の『週刊朝日』に掲載されたもので、1947年に出版された『自然と理性』（秋田屋）に採録される際に末尾に次の附記が加えられていた。「終戦後二ヵ月ほどの間、色々な新聞や雑誌からの原稿の依頼を固くお辞わりして沈思と反省の日々を送って来た。その間に少し気分が落ち着いて来たので初めて筆を執ったのがこの一篇である。一年後の今日から見るとまだまだ反省が足りないが、その時の気持がある程度まで現われていると思われるので採録することにした」。反省は別に彼から科学を遠ざけることはなかった。科学に対するほとんど絶対的といつていい擁護のなかに表現されているのは、科学の超越である。科学によってもたらされる知は、それがたしかに人間の産物であるとしても、人間を超越している。したがってこの知そのものが、人間に対して

いまある人間を超え出ること、すなわち「進化」を要求する。科学は人間の手から出発し、人間を超え、やがて人間を取り巻くようにして存在する。人間は科学となった知を勝手気ままに捨て去る権利をもたず、そうした行為はむしろ人間そのものに仇となって返ってくる……。このような科学認識のなかで、彼は戦後も依然として次のように語る。「微力な私が日本の再建に、そして世界の進歩に少しでも貢献し得る道がもしありとしたならば、それはこの科学の道を描いて他にはあり得ないであろう。今の日本において純粋科学のみに身を託して恬然たるは不道徳でさえあるかも知れない。ただ私にはこの道を離れて世のため人のためなんらかの役に立ち得る自信も能力もないのである」【★16】。

純粋な科学、純粋な合理性、あるいはもっと約めて純粋理性、この概念に対する信頼は揺らぐことがない。批判の余地なき彼の純粋理性にはどこもカント的なところがなく、それどころか、「科学の進歩と人類の進化」と題されたエッセイのなかで、進歩と進化のギャップとを指摘しつつ、次のように語る権利さえもっていた。

原子爆弾が文明の破滅に導くか否かは、これが出現した地球的世界に人類が全体として適応するか否かにかかっている。…自然科学だけでなく、人文科学も社会科学も含めた人類の持っている知識の全体としての学問の進展こそ、本当の意味で人類を救済するものである。万一原子爆弾が人間を戦争にかり立て破壊——自滅へと導くことになったならば、それは物理学のうちたてた高度の文明世界に

生物としての人類が適応しなかった証拠になるといえるかも知れぬ。【★17】

これは恐ろしく徹底した、しかも恐ろしい認識にみえる。科学の見出した知——たとえば原子力——だけが、人類不在の場所で運動をつづける世界。人類不在の地球の空にも、月は昇り日もまた昇る。これが戦前の彼がみていた「寂寥」だろうか。原子力の存在は、人間のもたらした科学が人間を超越していることを、不穏な形で証明しているのだ。おのれの存在を厳しく原子物理学の内部に縛め、存在もろとも「寂寥」たる科学の世界のなかに投げつける。しかし、おのれの肉体を特殊な領域のなかに縛り付けることにおける、この徹底ぶりが、逆説的にも彼を、戦後史に残る知識人へと変貌させたように、わたしには思える。それはけっして、「自己の階級を拒否」し、「追放」者の資格でそうなるどころの、「普遍的な」知識人ではありえなかった。

III 開かれた特定領域

湯川にとって、先の戦争は、非合理性の野蛮な勝利によってもたらされたものである（「理性のみ発達し意志の薄弱であった精神が、非合理的な、そしてそれゆえにかえって強烈な意欲を持った精神に圧倒されてしまった…」【★18】）。したがって、その反省は明快に、合理性の領土を拡張していくことに向けられる。「合理性ばかりを強調すると、人生が味気なくなるといわれるかも知れない。それにしても合理性の支配する領域はまだまだ少な過ぎる。少なくとも今日の世界においては、合理性の支配する領域を少しずつ

でも拡げて行く方向にこそ人間の進歩の道があるであろう」[★19]。この点は、戦後、ヨーロッパの知識人たちが、ファシズムがもたらした計算し尽くされた一民族の抹殺をひきあいに、いきすぎた西欧合理主義を批判していたのとは根本的に反対の態度である。科学となった知、またの名、合理性は、人間が気ままに手放せる類いのものではない。ならば湯川の思想において非合理性はどのような形で存在していたか。それは、合理性の追究にひとを向かわせる、一種の《開口》としてである。

科学の進歩は、人間の外なる世界を合理的に理解することに成功してきた。この外なる世界といわれるものの中には、われわれ人間の身体さえも含まれている。しかしそれと同時に、この外なる世界には、まだ人間にとって未知なるもの、まだ合理的に理解できないところのものがこっていることを、科学の進歩とともに、よりはっきりと認識するようになってきた。そういう意味で、人間は開かれた世界に生きているのである。これに反して人間の内なる世界、普通に心の世界といわれているものもまた、同じような意味で開かれた世界であることは、かえって軽視されるか、忘れられるかしてきたのである。…内に向かってもそとに向かっても開かれた世界に生きているのが、人間のありかたの特質である…。[★20]

湯川が生きようとした合理性に貫かれた《特殊な》領域は、その外側、あるいはその内側にある非合理性の領域に向かって、開かれている（彼のいう合理性と非合理性は、「思

考者としての人間」と「観察者としての人間」といいかえてもかまわないだろう）。彼が戦後、《知識人》として脱皮を遂げるのは、おのれの専門領域を飛び出すことによってではなく、専門領域において知をとことん追究することによってである。戦後の多くの知識人のように、「反省」によって道を折り返すことでそうなのではない。むしろ、湯川の「反省」は、その字義に反して、おのれを前に、あるいは深みに突き進むやり方を選ばせたように思われる。合理性と非合理性の矛盾のなかで屈折する弁証法的な要素はほとんどないといっている。たとえば絶対零度にあっても原子が振動する零点振動のように、観察によって見出される非合理性は、より高い合理性のために組み込まれたステップである。同じく人間の意志や欲望、湯川の言葉でいえば「気魄」のような非合理性は、合理性の追究と拡張のためにのみ、許容され必要とされる。彼はことあるごとに、人間が非合理的な生き物であることを強調する（「歴史を直視する人々がそこに人間の理性を超える非合理性の支配を認めざるを得なかったのも、まことにやむを得なかったであろう」[★21]）。しかしそうであるからこそ、「われわれは自分の意識の底深くひそんでいるところのいろいろなものを、意識の面にまで浮びあがらせるか、あるいは、われわれの理性が、理性自身を深めて、より深いところまで沈みもぐってゆくことによって、人間性のより広い領域を合理的な思考の圏内に入れてゆくことが、出来るのである」。そしてそういう努力によって、「人間性の喪失とか、分裂とかいう危険を救うという方向に、人間は進んでゆかなけ

ればならない」と考えている【★22】。

非合理的なものを合理化することは、はたして合理的か——むしろこれはほとんど非合理的な情熱、狂熱というべきではないのか。非合理的な人間が合理的になることこそ、「人間性の喪失」といわれていたのではなかったのか。

科学がはたして人間を幸福にするものであるかどうかということが、最近しばしば問題にされているのであるが、これに対して自信をもって答えることは決して容易ではない。…科学とは、人間の前につねに開かれている未知の世界を開拓してゆく努力の現われであり、人間にとっての新しい可能性の発見であった。未知の世界の中にはたしてなにかがあるのか。新しい可能性が発見されるということがかならず人間を幸福にするものであるという保証は、もともとない。それは、幸福と繁栄への可能性の発見であると同時に、人類の破滅と、人間性の喪失への可能性の発見でもあるかもしれない。【★23】

人間を幸福にするか不幸にするか判断がつかないものに向かって進む努力は、はたして合理的か。否である。しかし湯川はそのことに頓着しない。というより、人間性を合理性の圏内に入れること、「これが現代人の知恵というものであると、わたしはひそかに思っている」【★24】。「ひそかに」というのは、合理性の領土を拡大しようとする欲望が非合理的なものであることを自覚しているという意味だ。元来非合理的とされる人間が、おのれを超え、ひとをしてそれに従わしむる合理

性を拡大しようとするのが、非合理でなくしてなんであろう。そして合理性が人間を超越して存在しうるものである以上、「現代人の知恵」は「ひそかに」しか語りえぬものである、という意味でもある。しかし、この合理性に対する非合理的な欲望を貫くことによって、彼は閉ざされた専門領域の壁に、ときに非合理的な現実社会に接する戸口を設ける。こうして、専門家のまま、職人のまま、科学至上主義者のまま、さらにその内部に深く沈潜することによって、非合理的な人間について語る知識人となる。第二次世界大戦以後、原子力が人類的な問題となったということは、大きな要素であるとしても、表面上のことにすぎない。

IV 特殊な知識人の責任のとりかた

戦後の湯川の政治的な活動を振り返っておこう。世界平和アピール七人委員会、バグウォッシュ会議、憲法問題研究会、世界連邦運動、科学者京都会議。これらに主要メンバーとして参加しつつ、本人が望まぬ形ながら原子力委員会の初代委員の一人として、「原子力の平和利用」についてもっとも慎重な学者グループのひとりという立場から日本の原子力政策にもかかわり（1956年1月から1957年3月まで）、1958年にはジュネーブで開かれた第2回原子力平和利用国際会議にも、日本政府の代表として出席している。また、1963年に生じたアメリカの原子力潜水艦の寄港問題に際しては、積極的に寄港反対の側にたち、政府に対する抗論を参議院の外務委員会ですべている。大雑把にいえば、戦前の中間子論から戦後の素領域理論へ。物

理学を通じて自然の奥深くへ分け入りつつ、彼はこれだけの政治活動を繰り広げていた。

こうした活動を、隠された政治趣味が戦後になって発露したものとして、彼の内面的本質に加えられるべき、もうひとつの別の側面とみる必要はもちろんないが、かといって「純粋科学」に没頭することを夢見た学者が、時代の制約によって不本意ながら行なったものとみるべきでもないのだ。たしかに、つねに「科学者の立場」からやむなく語っていると解釈できる発言が散見されるのも事実である。たとえばバグウォッシュ会議に参加したのちに語った次の一文。

今までたびたび国際会議に出席したが、今度のバグウォッシュの科学者の会合ほど、私に取って苦手の会議はなかった。自分の専門でもないことについて、声を大きくして論争する勇氣は、残念ながら持ちあわしていなかった。[★ 25]

あるいは、アメリカの原子力潜水艦寄港問題について、参議院外務委員会における寄港反対答弁のなかから。

私たち科学者の多くは本来、決して学問以外の領域の問題に対して発言しがっているわけではありません。しかし科学の進歩、とくに原子物理学の進歩の結果として、原子力の平和的利用および軍事的利用が行なわれるようになり、それが日本国民の安全に、さらには人類の存続にさえも、重大な影響をおよぼすことが明らかとなった以上、私たちは科学者としての社会的責任の重大さを痛感し、

あえて発言せざるを得なくなったのであります。[★ 26]

原子力委員会委員辞任に際して、知己湯浅佑一による「湯川君はデリケートな学究肌の人」というコメント [★ 27] を加えてもいいだろうか。湯川は戦後、日本において「科学者、あるいはもっと広く知識人が、自分たちの社会に対する責任を真剣に考え、また世界平和のためにどれだけかの貢献をしたいと思うのが、むしろ当然のことと、世間一般に受けとられている」ことに、たえずいくらか留保を付けていた。かえって、ヨーロッパにおける「科学の伝統」を次のように紹介し、強調していた。

ヨーロッパを中心として進んできた科学の長い伝統の力は、私ども日本の学者が考えるような、なまやさしいものではない。…科学者の好ましい性格のひとつとして、自分の研究には熱中するが、他のことには無頓着である——あるいはノンシャランというような言葉で表現される性格があげられてきた。…科学者に望ましいもうひとつの傾向として、どんなに研究に熱中しても、同時にあくまで冷静であることが強調されてきた。それはいろいろな感情や、利害や、あるいは真偽以外の価値判断によって影響されないことを意味していた。[★ 28]

湯川は、当時の日本で当たり前になっていた知識人と社会的責任の連続性を、むしろ切断しようとしている。「真理のために真理を探究することだけに、自分の全精力を集中し

得たならば、どんなに幸福であろうか。こういう気持ちは純粋な科学を研究する真面目な科学者のほとんどすべてに共通する所のものである。しかしそれは最早や昨日の夢である」【★ 29】。ならば湯川はどのような資格において社会について語るのか。それはやはり、科学者としてである。

科学者はこうあるべきだという常識的な枠がある。アインシュタインは、既成の枠に入りきらないほど偉大な人間であった。そして、そういう科学者が出てきたことが、枠そのものを拡大する原因の一つともなったのである。今日では科学者が平和運動に関係しても、——その仕方には、おのずから「科学者らしさ」という限界があろうが——それ自体が枠をはずれたこととは見なされなくなってきたのである。ずいぶん変わってきたものである。

しかし、私はこの変化は当然であり、むしろ今までの方がおかしかったのだと思う。何故かといえば、アルキメデスの昔から二〇世紀に至るまで、科学者が軍事研究をするのは変わったことと思われていなかった。…科学者が軍縮問題を研究するのも、広い意味では一種の軍事研究であるが、その方向が逆で、自国および他の国々の軍事力を削減する方向に向かっている。世界平和のための努力という点を除いてしまっても、前者が当り前のことで後者が変わっていると判断するのは、おかしいことであったのである。【★ 30】

この二つの引用で、湯川がどのあたりに焦点を置いているかがわかる。社会の問題が科

学の枠に入っているかぎり、「ノンシャラン」な科学者が知識人として振る舞うことは矛盾しない（そしてこちらの方が歴史的には通例だったともいっている【★ 31】）。おそらく彼が自分に禁じているのは、知識人として、人間社会を《代表》して発言することである。社会を代表するためには、おのれの所属する特定領域に無関心であることが要求される。そうでなければ代表することなどできないからである。しかし、彼の科学者たらしめる関心、もっと強い言い方をすれば欲望は、取り除くことのできないそれである。それを捨てれば「普遍的な」人間になれるとしても、あくまで「特殊な」科学者であることを望んでいる。特定領域の科学者として、社会のその時々の問題が科学を通して理解されるのが望ましい場合にだけ、少し言葉を口にする。つまり非合理的なものを合理性によって克服しようとする科学者の意志の中心においてのみ、積極的に社会に責任を負おうとする。

アルキメデスの軍事研究についての発言は、彼の「反省」がいかなるものであったかを、自ずからあきらかにしていると、わたしには思われる。先述したとおり、強いられたものだったとはいえ、彼は戦中、核兵器の研究に従事していた。しかし、いかにその結果が不幸なものであったとしても、その行為自体は科学者の仕事に属する。誤解を承知でより正確と思われる言い方をすれば、彼の「反省」は、核兵器という科学の生み出した結果が、科学そのものを不可能にするような非合理を見抜けなかった点にある。非合理性は合理性＝科学の追究とその拡張のためにのみ、許されているからである。だから彼は、けっして

社会や世界に対して「懺悔」するといった類いの「反省」を行なったのではない。彼は芯から科学者だった。だがそれゆえに、彼は科学者の社会的責任を、真っ向からその身体に具体的に請け負うことができるのである。あらゆる階級から「追放」されているという「普遍的な」知識人に、いったいどのような責任がとれるだろうか。なにものでもない、ただ人間としかいえぬ彼らが好んで「責任」という言葉を使うにしても、この概念をおそろしく形而上学的にする以外に道があるだろうか。「特殊」であるがゆえにかえって、社会あるいは世界に開かれているという、湯川の知識人としての特殊性に、われわれはもっと注目していい。

V 「道具」をもった知識人

ノーベル物理学賞を受賞する前年の1948年、湯川は小林秀雄と対談している。小林は、作家であり日本の批評家の嚆矢といわれる存在であるとしても、以後の批評家のような「普遍的な」知識人ではけっしてない。むしろ文学という局地において戦った知識人である。たがいの専門領域のギャップが議論の深まりを阻害しているようにみえるこの対談において、興味深いのは、時折、局地で戦う者同士の、矜持のぶつかり合いや尊重、共感がにじみ出ている点である [★ 32]。

小林 …たとえば芸術家の問題でも、芸術家の自然観測あるいは人生観察という問題があります。量子物理学で対象をどんどん純化していく。とうとう最後のものにぶつかると、見るという行為と見る対象が離せなくなると

ころまで対象の方をやっつけている。そういうところまでぶつかっているわけでしょう。芸術家の場合はむしろ逆に観測行為の方をどんどん純化していくのです。認識の方を純化していくのです。そうするとやはり対象観念がだんだん消えてきて、見ることを見るような境地に行くわけです。そういうふうに、やはり認識の対象と認識の作用とが同じところまで行かないと画家の眼玉というものは完成しないのですよ。そこまで行くのですよ。だから結局最近の物理学者が達している、たとえば対象の攪乱だとか、オペレーションとか、そういう概念も、常識的にぼくらがよくやってきたことなんですよ。…現代の物理学者の実験、観測行為というものを重んずる立場と非常に近いのです。ほとんど同じなのです。湯川 …物理学者であれば対象をどこまでも分析して行って、いくらでも相手を細かく純粹なものに取出していくことができるわけです。それはできますけれども、しかし実際観測をするという以上は何かの形で、われわれが眼で見るとか、耳で聴くとかしなければいけない。それをしなければ頭で考えるだけのことになる。…感覚世界がなくなってしまうたら、物理学でも実証科学でもなくなる。…そこにどうしても人間的な感性的なものが残らざるを得ないのです。…そこにはやはり芸術家などと同じところがあるのじゃないかと思う。

彼らはたがいの差異や共通点を、それぞれの専門領域から眺めている。彼らが話題にする「観測行為」は、議論の進展とともに、ただ「道具」といわれるようになる。

小林 …芸術家が形而上学的な要求を持っているとしても、形而上学者ではないということはいまの道具が要る。その道具というのはおっしゃる観測機械と同じことなので、芸術家の使っている道具というのは、たとえば観念でも、思想でも、みんな日常言語の組織という道具です。…それで何か仕事をつくりまますね。それでなければ芸術といえない。その芸術といえないという意味合いは、観測しなければ物理学者とはいえないという意味合いとぼくは同じことじゃないかと思えます。

湯川 …その点芸術家などと同じです。絵筆を捨ててしまったのではどうしても絵描きになれない。

しかしその場合に…芸術家といっても絵描きとか、音楽家だと、それは筆で絵を描くとか、バイオリンを弾くとか、はっきりしていますね。小説家みたいに、言葉での表現だけになってきますと、思想と道具の区別が非常にむずかしいと思えますね。

小林 非常にむずかしいですね。原理的には同じなだけけれどもね。要するに言葉が道具にならなければならぬのですから。言葉というのは、非常に観念的なものが、物的な道具と見えて来て、使いこなす事ができるようになるのはむずかしい、詩人の仕事です。詩人の使う言葉は決して観念じゃない。詩人は画家が色を、音楽家が音を使うように、道具的に言葉を使っているわけです。

小林は言葉を観念でなく道具と考えている。その点に湯川も異論はない。一方は言葉という道具を文学にまで磨き、他方は同じ道

具を科学にまで磨く。それは同じ鉄が人を殺す武器となり、人を生かす農具となるのと同じことである。同じ人間であっても農民は鋤鎌でもって自然（土）と語り、兵士は剣と盾でもって自然（敵の肉体）と語る。彼らは道具を通じて行動し、道具によって世界と交わる。道具としての言葉の局地性が、小林と湯川を特定領域の知識人にする。その場合に、彼らがここで語らず暗黙のうちに共通理解としているのは、この道具が捨てられるものではないことである。文学者であるかぎり、詩としての言葉は捨てられず、物理学者であるかぎり、科学としての言葉は捨てられない。言葉が道具性を失えば、それはたんに《観念》になる。彼らは人間である前に科学者であり、文学者である。言葉は観念にすぎぬといったところで、ならばいかにしてひとはひとと交わるのか。むしろ観念にみえる言葉を道具にまで高めることではじめて、ひとの社会は具体性を得るのではないのか。「科学だって一種の芸術ですし、芸術家はまた一種の職人ですからね。自分の人生観なり、形而上学的観念から演繹する事が仕事ではない。具体的な仕事の方から逆に常に教えられているでしょう。その具体的な仕事には職人はいつだって忠実ならざるを得ないから、そういうことになる」（小林）。「また、そこで忠実でなければ、りっぱな仕事はできません」（湯川）……。

戦後の湯川は、「素粒子は点ではなく、固有の拡りをもつ」という信念にもとづく非局所場理論から、時空そのものに原子論的構造を見ようとする素領域理論へと向かった。未完に終わったこれらの研究の科学的な価値について、専門外のわたしに論じる資格はな

い。人文学者であるわたしが詩的に理解したところからいえば、時空そのものが、原子のような固有の延長をもち、その上を通過する粒子は時空の個性にしたがってさまざまな形象をとるのであり、抽象的な平面として受けとられる時空に厚みや奥行きをもたらそうとするものである。いわば、時空の地理学化である。しかしこの不思議な議論から、彼の知識人としての一貫性と、彼が夢見た「世界連邦」がいかなるものであったかを、少しだけ理解できるように思われる。彼のいう「世界」は、けっして抽象的な理念や空疎な観念ではなく、具体的かつ固有な地理空間として構想されていたということである。というか、「世界」が抽象的な時空において考えられているかぎり、世界連邦はついに手の届かぬ理念にとどまり、具現化される権利さえもたないだろう。彼はあくまで科学者として、世界について思考していた。それは小林が、言葉を観念ではなく具体的な「道具」としてたえず思考しようとしていたことと、同じなのである。

VI 特殊な知識人の狂気

フーコーは、「特殊な」知識人はつねに危険に晒されているといていた。状況的な闘争や部門ごとの要求事項に留まってしまうリスク。局地的闘争をリードする政党や組合に操作されるリスク。外的支援を欠くためにグローバルな戦略を展開できなくなるリスク。非常にかぎられた集団によってしか継続されないリスク。しかしにもかかわらず、「特殊な」知識人の役割はますます大きくなる、とも指摘していた。

偉大な「普遍的」知識人へのノスタルジーにも関わらず…、この役割は放棄されるべきではない。…好むと好まざるとに関わらず、原子物理学者、遺伝学者、情報科学者、薬理学者、等々である限り取らざるを得ない政治的責任に見合って、特定の知識人の役割はますます重要になるべきである…。[★ 33]

フーコーの指摘をどう考えるべきか。わたしには、今日の社会が必要としているものに見える [★ 34]。一方で、こうした「特殊な」知識人への道のりが困難であることも、よく理解される。小林がいうように、仕事は職人が生み出したものである。だが、その同じ職人が「具体的な仕事の方から逆に常に教えられている」。つまり、小林や湯川においてそうであったように、おのれが生み出した文学や科学そのものが、おのれを超越する存在となるまでに、仕事を高めることができるかどうか。湯川は完全な可知論者だった。「古い人の考え方と若い人の考え方とが一致するらしいんですが、つまり大自然というものは広大なものであってですね、人間には絶対に汲みつくせぬものであるということです。…しかし私はそんなことはないと思っています。…将来科学がずんずん進歩して、わからないことがないということになるでしょう」[★ 35]。人間はいずれ、すべてを知りうる存在となる。だが、その一方で湯川は人間はいずれ滅亡すると考えていた。「私の未来論の中では『人類は滅亡するかも知れない』という魔物が、でんと居坐っていて、どうしても追出せない」[★ 36]。全知と滅亡という極端なもの同士の弁証法なき共存。たしかに全知

なくして学者の真の責任意識はなく、滅亡なくして真の危機意識はない。行動のため無造作に投げられた臨機応変のマニフェストとみることでもできるが、この狂気の共存を可能にする理論はある。先にも別の形で確認したとおり、人類の生み出した合理性、科学にまで到達した知は人類を超越している、と考えればいい。おのれの生み出した科学がおのれを超え人類を超えうからこそ、人類はすべてを知りうると同時に、滅亡すると考えることが可能になる。人類なしに、ひとの知が踊る世界。われわれは、若き湯川が見通していたこの「寂寥」のなかで、仕事に打ち込むことができるだろうか。専門領域をもたぬことによって可能になる「普遍的な」批判とひきかえに、いざというときに取りうる責任の形而上学化を避けられないとすれば、危機のたびに、宿命的に知識人概念の機能不全を目の当たりにすることになる。その点、原子物理学の領域にこだわった湯川の責任意識の高さと実践性は考慮に値する。ひとはみな特殊である。有限である。あらかじめ用意された抽象的な時空ではなく、さまざまな高さからなる具体的な地理的・歴史的時空で仕事をする。そこで、おのれの特殊な仕事をできるだけ高いところへ持ち上げようとするしかできない、そんな不器用な生をひとは生きている。そのことをいま一度、痛感せねばならないと思う [★37]。

■註

- ★1——ミシェル・フーコー「知識人の政治的機能」（石岡良治訳）『ミシェル・フーコー思考集成VI』筑摩書房、2000年。
- ★2——ジャン＝ポール・サルトル『知識人の擁護』

（佐藤朔・岩崎力・松浪信三郎・平岡篤頼・古屋健三訳）人文書院、1967年。

★3——おそらく日本において「普遍的な」知識人が生まれたのは戦後のことであり、戦前に丸山真男や吉本隆明のような人物を見いだすのは困難である。日本の批評家の嗜好とされる小林秀雄でさえ、あとで触れるように、職人的な文士の立場にこだわっていることは、数々の発言から理解される。ただし、遡って「普遍的」知識人の原型を見いだすことは可能である。すなわち夏目漱石や森鷗外である。紙幅の都合上触れることができないが、実際、日露戦争などの政治的状況に対し、作家という立場をこえ公的に政治的発言を行なったケースが多々みられる。

★4——ジャン＝フランソワ・リオータル『知識人の終焉』（原田佳彦・清水正訳、法政大学出版局、1988年）やエドワード・サイード『知識人とは何か』（大橋洋一訳、平凡社、1998年）などにみられる知識人論は、そうした知識人性の当時の混乱をよく物語っている。

★5——この種の団体や会議が世界各地に創設されており、日本には科学者京都会議が、イギリスにはThe British Society for Social Responsibility of Scienceがある。

★6——1967年2月20日付『朝日新聞』夕刊。

★7——福井崇時「日米の原爆製造計画の概要」『原子核研究』第52巻1号、2007年、日本科学史学会編『日本科学技術史大系』第13巻物理化学、第10章物理学における戦争の投影、第一法規出版、1970年、読売新聞社編「日本の原爆」『昭和史の天皇』4、読売新聞社、1968年、半藤一利ほか戦史研究会編『原爆投下前夜——ベルリン、ワシントン、モスクワ、そして東京』角川文庫、『仁科芳雄往復書簡集 現代物理学の開拓3』みすず書房、2007年、ほか。

★8——前掲福井、2頁。

★9——同前、3頁。

★10——同前、4頁。

★11——田中正『湯川秀樹とアインシュタイン』岩波書店、2008年ほか。

★12——湯川秀樹『極美の世界』序文、岩波書店、1942年。

★13——井上健「解説」、同編『湯川秀樹集』、彌生書房、1983年。前掲田中正は、湯川の科学

に対する態度、そして戦前に教え子だった井上の抱いた感想を重ねて紹介しており、戦前の湯川の思想を考察するにあたり、本稿は田中正の提示した流れを踏襲している。

★14——湯川「科学の伝統」1941年『湯川秀樹著作集』4、岩波書店、2007年。前掲田中正は湯川のこの一文を科学至上主義的・合理主義的ではない「秘められた一面」として紹介している。

★15——湯川「静かに思う」『自然と理性』1947年、著作集5、12-3頁。

★16——湯川「科学と希望とについて」『潮流』1946年6月、著作集5、15頁。

★17——湯川「科学の進歩と人類の進化」『京都日日新聞』1947年8月14日、著作集5.41-2頁。

★18——湯川「自己教育」『世界』1946年1月号、著作集4。「日本が今日の悲運に際会したのも、一つには知識階級という防護林が貧弱で、破滅に向って進んで行く水流を制御できなかったためであったとも考えられる。…そこで欠けていたのは真の勇氣と実行力とであった。理性のみ発達し意志の薄弱であった精神が、非合理的な、そしてそれゆえにかえって強烈な意欲を持った精神に圧倒されてしまった所に日本の悲劇があったといってもよいであろう。

★19——湯川「原子力と合理性とについて」『毎日新聞』1946年8月5日、著作集5、29頁。

★20——湯川「科学と人間性」『人間と科学』中山書店、1956年、著作集5、164-7頁。

★21——前掲湯川「原子力と合理性とについて」28頁。

★22——同前、150頁。

★23——同前、148-9頁。

★24——同前、150頁。

★25——湯川「科学者の責任」『平和時代を創造するために』岩波新書、1963年、著作集5.153頁。

★26——湯川「寄港問題と科学者」『世界』1963年8月、著作集5、236頁。

★27——1957年3月20日付『毎日新聞』。当時の新聞は辞表提出の背景に原子力発電早期開発への不満と宇治実験炉設置問題とを推測している(1957年3月19日付『朝日新聞』など)。加えておけば、湯川の原子力委員会委員辞任ののち、中曾根康弘が「原子力政策改革の要」と題する手記を読売新聞(1957年3月24日付)に寄稿し、

湯川の原子力政策憂慮の理由を論じている。

★28——湯川「科学の伝統」『現代科学と人間』岩波書店、1961年、著作集5、158-9頁。

★29——湯川「科学と道徳」『世界』1957年9月、著作集5、163頁。

★30——前掲湯川「科学者の責任」173頁。

★31——これについて、フーコーは逆の側から同じことを主張している。すなわち、「普遍的な」知識人という形態は、19世紀と20世紀前半にかざられる事例である、と。前掲「知識人の政治的機能」参照のこと。

★32——湯川秀樹・小林秀雄「人間の進歩について」(『新潮』1948年8月、『小林秀雄全作品』16、新潮社、2004年、9-84頁所収)。以下引用はすべてここから抜粋。

★33——前掲フーコー「知識人の政治的機能」148-9頁。

★34——フーコーの「知識人論」に批判的な近代主義的な論者も、湯川の事例をみれば納得できる部分もあるのではないかと。また知識人としての湯川を知らぬポストモダニストにとっても、フーコーの知識人論との共通性から湯川を論じるための言語を手に入れられるようになるのではないかと。本稿は、両者の偏見や看過を少しでも改善できればという考えのもとに書かれている。

★35——小谷正雄・林忠四郎・湯川秀樹・渡辺格「物質・生命・宇宙」『科学の実験』1967年1号、共立出版、21-2頁。ただし幸福の問題は残るとしている。

★36——湯川「人間の未来について」『自己発見』毎日新聞社、1972年、著作集5、322頁。湯川はこの論考で、人間は人間自身を含めた未来を完全に予測することは不可能であることを強調していた。

★37——本稿は、多くの教示を得た前掲書の執筆者であり湯川と同僚であった田中正、同じく同僚であり、世界平和アピール七人委員会の委員のひとりである小沼通二、そして湯川の最後の教え子のひとりであり、京都大学基礎物理学研究所現所長九後汰一郎の三氏との自由な対話なしにはありえなかった。記して感謝する。

たなか・きお——京都府立大学文学部研究員